

911.3
八
中

俳諧十論

中

才八言行論

抑も能儀の言りとはいふおとろけおこりおこりおこり  
儒師の大たり老在揚墨のたるといふれり言りの  
物とていふれむはれ申すも凡雅のたるといふれり連儀の  
おありて當時よりと連言とて人のまのくくか  
あつた中子以上の人とておは月雲の蹟跡とていふれり  
花鳥の色にまゝいふて町人百姓の所長とていふれり  
三罪の言とていふて素直の男とていふれり連言とていふ  
とよりいふてや草花の言とていふれりかまはれり



一論

一書  
一  
つれと兼に老の口所を置かれし一書は能清と評  
へ中以下<sup>口傳</sup>に凡雅とひらめせし中以下<sup>口傳</sup>の言は  
めて中以下<sup>口傳</sup>の人とていひし何れもよきといひ  
地の名はのまし能清とまきく及びおほくの月とまき  
猿にまのの喩とあはれおほくあつちあつちのあら  
りせややまを能清くとせられし洛陽を凡雅のほやと  
せり武城と凡雅の言とせられし書物の  
婿とあつちて作さし作さしおほくおほく  
ちの塔よのちりて九重の階子とせり一書は  
いある情知博覧の人とて句の博とす人あし人あ

能清とあしとせられし史記も能清とせりて博の歌に  
ましとせりし物のまなとせりて論の歌のまな  
とせりし能清とまきく一書は能清とせりし  
つとせりし雅俗のちりて凡雅の二つとせり  
言とせりし能清の言は能清とせりし能清と  
すあはれ耳とせりし能清とせりし能清とせりし  
とせりし能清とせりし能清とせりし能清とせりし  
ひく人の言とせりし能清とせりし能清とせりし  
とせりし能清とせりし能清とせりし能清とせりし  
の言とせりし能清とせりし能清とせりし能清とせりし

所方の白状より世に能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 起とすあつねく分はくあさうらふれむい人の耳  
 を遠く調とさへいむとせよあつねのけいひあつねと  
 せよ一せくむいふらふらふらと能借のめと不  
 ちらふらふらふらとせよ一せく能借のめと不  
 とも能借をせくせくせくせく何の初は  
 何のら新くん<sup>新</sup>あつねの時とせよあつねとせよ  
 何のら新くん<sup>新</sup>あつねの時とせよあつねとせよ  
 町人も百姓も素内の僧も武家の侍とも何の利用  
 せよ能借とせよ能借の賤くぬく一たゆ人よ

全く表裡の人とふ一に能借のくせきああり  
 せよ能借とせよ能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 子能とせよ能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 此家の誠とせよ能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 能もせよ能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 らのせよ能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 とも能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 目よ能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 能借の賤くぬく一たゆ人よ  
 能借の賤くぬく一たゆ人よ



起造と合せしむる耻の二字を例の教ゆして律を  
紀傳の論語あるにんやられし紀傳異處の言  
ふてはよふはむとむてあはらこあらん我が家の  
まよひしよとほらわんて何へともたさるるん  
あしし

才九変化論

亦も紀傳の變化とら世法よ今日のらおもして万物  
の不定とあらくきとせえたり付と天地の變より  
雨より風より火より水と蒼とはらるる秋と冬と  
ちねふとちりけんと人間の變よりして思とおして

ほとあうやんよなむおて子にあらうひまはあふ南殿  
のむにあなひらやんお印のおあよあひむ變化を  
天地のはわちりとかしらるる人のあらわらせまに  
紀傳の變化と論をくおむらるる物と古今の變を  
よとらまちり物と一中との變をせられむの紀傳  
の始中終のことりて昇のこく屍とまをせられと  
例の倍として雅あつて今この紀傳を始終の二口傳を  
りて中に風雅の情と結きりけり一中との變をこつた  
全く附合のはりして百劫を會するをあるなり  
はれし附合の法とらやんせらるる降らるるあふ

親しく附るも要ふべし疎く附るも要ふべし  
全く附らざるも要ふべし一入るべし二句の句意は  
おとそ七句を及ぼしたるべし世に世に秘蔵  
のりせむとく神家に此の附にあり第一と  
有る附とよみ号の有るふて可く一入るべし  
およぶ句の意はとんばく一入るべしと題  
あやも次と會釈とつひも次と道句といふ一巻の  
を會てけしよ変化といふ一はれ御借のあはれ方とよ  
む附の附句よむる時も是とて我句とあはれ  
り始よ三句の打熱とてはしよ次よ三句のはし  
り

おとそ七句を及ぼしたるべし世に世に秘蔵  
のりせむとく神家に此の附にあり第一と  
有る附とよみ号の有るふて可く一入るべし  
およぶ句の意はとんばく一入るべしと題  
あやも次と會釈とつひも次と道句といふ一巻の  
を會てけしよ変化といふ一はれ御借のあはれ方とよ  
む附の附句よむる時も是とて我句とあはれ  
り始よ三句の打熱とてはしよ次よ三句のはし  
り



あつとやちのとはせのいふはくは膝よ一カ世の銀  
とやいふくは世のやち揚井よあつとむむとらふ  
おちの夜とまららんをちて會合とらひ道向  
とらふ會合とや世のむつうおつよそ人の衣れ  
浪たつた、さらのめらるる妻色うて夜ふせと除  
るせはらつと世向の後よ室人あつとらふとらふ  
むつうとらふ時の機あせちうとらふ初とあせと向も  
け會合とらふとらふ。おあれらて中の操おらちまうに  
あつとせ世の時向もけ向とらふとらふとらふ  
とらふあつとらふとらふとらふ自由あつとらふとらふ

の地とらふはげて一ゆらの妻代いけ會合とらふとらふ  
い同族あつとらふとらふ。凡雨とらふとらふのきくいふとらふ時  
のあつとらふとらふ道向い軽く會合とらふとらふ  
あつとらふのちとらふとらふとらふとらふの有る附とらふ  
とらふの操おとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
ひとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
とらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
ひとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
あつとらふの位地ちらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
あつとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふ

け附言うを先よはの論あり中より能借の事あり  
其れお其の正まのりありとていふるの擧め  
しつたるありと其れありとありとありとあり  
高くと其れありとありとありとありとありと  
たれとありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとありとあり  
しつたるに世間の附言を先よはの思ふ者とあり  
りや句にありとありとありとありとありとあり  
先ねの附言とありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとありとあり

ありとありとありとありとありとありとあり  
といふ句の起るといふ指し附を諸路のあり  
宗因の向ふ字のありとありとありとありとあり  
しつたる頼政の附言に河のれ也して向附とあり  
い有る附の中れふるとありとありとありとあり  
人偏のさめとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとありとあり  
向附の法とありとありとありとありとありとあり  
ありとありとありとありとありとありとあり  
とありとありとありとありとありとありとあり



とはらりて御音といひ走といひ鼓音といふことある中此  
 中華式より八辨の附合あり今うら十論の記述とありて  
 附合のあり十五あるも附合をきくにはうら七名  
 八辨も之法の中此細注とある命一況や百韻の百書  
 ありんち附合もそれと附合にうら一しとされ連歌  
 も此語も佳名を各句より傳ふられと各句の太極  
 の一氣うら一して一應うらうらうて書よとされいなり  
 たりねもあくねと書もあくまうして法もあく式も  
 畢竟と信の二子よりても場を名人と初んとね  
 てよひのよひばつと論とん及りねたもく此語

の二まといふら神宿ありて枕とがいびげとあり  
 ぬ遊山歌水より人といふの抱ふも一應うらのうらいと  
 んよまねとて神身のあるねうら他人のねと書とねも  
 他人のねうらとて神身のねと書とてうらて論語に  
 何人といふ一語ありてとてとてとてとてとてとてとて  
 光りて又偏の法とありて第一にまよふ身歌の  
 名とありて風流とていふ此語とていふとてとてとて  
 んよまねとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 とも席よのともむ村とて衣食に一日の操婦とてとて  
 てとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて



と云ふ一なるまに文章の公道と稱言に能  
の世法と信を成じや海なる一能信の  
よるものま要ある才一有る附といふ  
才と云ふも亦一と云ふは即歸一の  
してこれら文章の端も何れも例の能  
のあらしむは能信の古今と稱して  
の論をのめたるも外務の二行に不  
あらんまに古今の法文と評す

「始」  
又「始」  
古記

「中」  
中記

「終」  
終記

録記とむ水の香

はれはれをあらぬまの昔の能信の  
とらけやふくの事一は情あり  
の事とう論むむ今の能信のま  
あり一は情とぬるまをれとけ  
文章の優るるともさるまあり  
其ことと評すは能信をまこと  
律美とてさるると教誡といひ  
一とあてて書きよあまふと  
凡雅と教誡の論を張するま書  
破愚と訂復の能見ちりと難一  
東西の二名の

又あるとも難しとらるるを突かすといふ業は子  
もつちさきもめて凡雅のよつちあつたあつた  
勸字文ともいひ座右銘ともいふかゝる馬  
の文章訓よけ論あり言ふ人のせうふいさか  
あれい始後之二と所資のに付とらるるに附合  
の四名の中に松子と色立の御文と評す

追ふこと さ用ハサ

さう路曲の突ヤイト者ともいふ

世句と檀林のちよひおて例よ言供の松子  
係と栲のおとけ 今の能考の松子 無れ

いれいに獅の髪ふとちと一松子と母よ其松  
とさうとく

あつちの松子とて く 白河の園

世言を頼政のおおきとて今く能國の言と  
つらとあつち松子と陸奥よ万里の松と評す  
白河よと色の松とあつちと遠近の用不用  
ありて松子松の松子の名あつち今も松子の  
ゆはありとやんて世に刺をいふあつち松  
とてなつちとらるる松とて今も松子とて

才一の句と一の句の連字能信ふと云ふは一と  
去つてその才一と去つてぬい何やらすなりかよかぬ  
せれらると同意とし尋ねるといふいと向馬の  
類説しけり論ありあらぬといふのは其を  
沈没する色のえんをせりといひて適句の中此一対と  
ちきり蓋かよひをの文法を始し起はると向附と  
いひたし中とと拵子と色えと両句の對と云ふは  
殊よふの二名と細及と一とを隔句の錯綜は  
双園の法も倒おをの格も句後の長短も諸路の勢  
ともいへり此句も一とを蓋かよひけ後の不可思  
は

一才一の句と一の句と梅とけと云ふのは  
編よかすともやまは能信の虚実と云ふは  
十編の信偽とともはらんや況や論語の信  
と云ふては民と又偏の三句と云ふは真觀群衆の  
口意と云ふはらんらんらん馬の文章訓の知の  
一字より通遠の二字と辨して是竟と身歎  
竹木の用あんとする言に才一の詞として鏗鏘  
の法もえうたれりといふは名のと訣らるるに  
わ一一一はけ後の畢竟と子重万化も期を  
よらるる大なりと有心附の云ふありては

久い老鳥も新しく世居よおつれい父母も古ん  
新古も今日日の変化して作名の儘よころま  
せなるもい能造のふ東と兵家の刀法これと  
うの世およ鬼答う「た」と供あつとも我家の  
ふ段と覚東あそふあつむまに氷又の二句  
どめて世十論と看破さるるにこれと能家と  
世住の和とあつうい虚妄の二論と人ふ此妻  
とばらふて能階とさうくまらぬ遊あねと  
涅槃の二字不説らりもわ能論とて能賦ね  
のらあつる

才十法式論

世も能造の法式と連うの家に入あつていよお  
遠波のさう一合も神木鳥獸のまきういも一た  
一司の物と二句と成くち七句ちりおと二句とあ  
二句ちりおと二句とあ一三句の式と二句とあ  
よとぬまのり中うら。事と典の掟うもるるおとた  
あつらふとあひ法とやまうんふとさあてせあて  
一やてんや能の成ういふうふ十約とつらる物とよ  
一都の式と百約とあつる三とせせとしく能造の法式

貞姓の清筆より理木に斧とつれ、鹽押に杖と  
 ひびく、こころも、今もさく、ころあひかへし、も  
 い古も、あつる、くまれせ、理、ふら、に、か、に、の、あ、あ、い  
 とや、く、や、斧、句、の、切、字、より、服、の、筋、字、も、才、の、  
 子、亦、は、も、哉、と、栗、と、の、和、訓、を、つ、し、採、と、を、と、此  
 き、趣、と、い、し、指、合、と、何、の、あ、ち、ら、や、去、嫌、と、何、の、あ  
 ち、ら、や、八、月、と、流、り、ち、ら、ん、我、と、心、事、は、と、あ  
 とも、能、指、と、何、の、あ、ち、ら、は、と、は、式、の、あ、ち、ら、  
 とも、ち、ち、ら、ち、ら、あ、ち、ら、と、さ、ら、な、ら、い、の、い、ま、は、に  
 ま、ち、ら、  
 一、ち、ら、の、論、語、と、夫、詩、の、ど、一、も、君、父、の、ん、ど、ら

一、て、點、本、の、ろ、と、あ、れ、と、ろ、ろ、多、識、の、二、ま、と、す、と、さ、ら、で  
 詞、の、ま、な、と、さ、び、し、ら、う、ら、あ、と、ろ、ろ、と、ま、り、あ、い  
 遠、く、と、儒、師、の、早、句、も、近、く、と、は、ん、の、書、と、あ、も  
 博、く、と、あ、ら、い、と、ち、ち、ら、と、あ、れ、と、ち、ち、ら、と、い、し、と、  
 八、つ、あ、ら、い、と、耳、く、と、耳、と、す、は、い、と、ら、ら、に、と、ろ、ろ、  
 ろ、ろ、ろ、ら、あ、ら、ら、ら、と、な、れ、せ、や、能、指、と、あ、ら、い、と、  
 我、と、我、と、い、い、あ、ら、い、何、の、あ、ち、ら、何、の、あ、ち、ら、我、と  
 ち、ち、ら、と、一、人、も、あ、ら、い、と、ち、ち、ら、と、あ、ら、い、と、  
 ち、ち、ら、と、一、人、も、あ、ら、い、と、文、子、に、あ、ら、い、と、書、物、あ、ら、い、と、  
 二、あ、ら、い、と、さ、ら、い、と、さ、ら、い、と、は、法、式、の、あ、ち、ら、と、

そ人を例の節のようなくそ人連きのうらや  
傾城猿木の標とありて能くをいせむらひや  
まゝとむけぬ、貞孝式とて宗匠のたと判者の  
法とと新式の二條とてうらと執事のたと一條と  
ありき、このはあり連えのはあり又條の例のらね  
とまゝとてしつらて、宗匠のらありやと才二にても  
人技とてこりげて我句よくとて宗匠とてい人の宗匠  
の教とてこりげぬより調子とて先かよりまゝとて  
凡雅の運ちられ、その能くのたと換とてむいふ  
りて人の節句あんに才一と附人のるはうたふ

とてこりて附句の能くと林とていふ句のたとは  
才二とて句の打撃よりいふ句のたとはと論とて  
句折の變化とて論のまゝとていふ句のたとは  
ありやとて句折のありやとて宗匠よりまゝとて能く  
のらとていふは、作者へいふとて、指令のうらと能く  
役ありとて宗匠のたとは、やとていふは、うらと  
のらとていふは、或とてまゝとて、保とてをいふ  
とて、能くをいふは、新式ありとて、才一の教、  
まゝとていふは、宗匠のうらとて、能くの時やとて  
月夜のあるうらとて、二年にまゝとて、彼等の

もるまゝにひらひらとせらるるやうな者向ふまゝの  
ある物ありし時向にすれば難いある物ありし時  
も物もまゝにひらひらとせらるるやうな者向ふ  
中らうとせらるるやうな者向にすれば難いある  
時ありし時向にすれば難いある物ありし時  
おちぢけの私にひらひらとせらるるやうな者  
まゝ知とせらるるやうな者向にすれば難いある  
はひらひらとせらるるやうな者向にすれば難い  
あるとせらるるやうな者向にすれば難いある  
はひらひらとせらるるやうな者向にすれば難い

とせらるるやうな者向にすれば難いある  
有性の物よりひらひらとせらるるやうな者向  
とせらるるやうな者向にすれば難いある  
古人の詞のすなはちひらひらとせらるるやうな  
業近の一體のふらひらひらとせらるるやうな  
之十二應の自在とせらるるやうな者向にすれば  
物とせらるるやうな者向にすれば難いある  
賭物とせらるるやうな者向にすれば難いある  
あらるとせらるるやうな者向にすれば難いある  
しとせらるるやうな者向にすれば難いある

例の危るれい強もて強も判者の責をいふべし  
 判者の心むを仇愆一入の強しとあふとあふ  
 ぢの強しとあふとあふとあふとあふとあふ  
 指合らざるの役あれと同一あふり時いひ  
 成して一入の強しとあふとあふとあふとあふ  
 南句のあふとあふとあふとあふとあふ  
 成して一入の強しとあふとあふとあふとあふ  
 ありつとあふとあふとあふとあふとあふ  
 あひつとあふとあふとあふとあふとあふ  
 とあふとあふとあふとあふとあふとあふ

其量の把詞とありとあふとあふとあふとあふ  
 價とあふとあふとあふとあふとあふとあふ  
 せられとあふとあふとあふとあふとあふ  
 一とあふとあふとあふとあふとあふとあふ  
 といはくあれとあふとあふとあふとあふとあふ  
 十量の能徳とあふとあふとあふとあふとあふ  
 例の難ふとあふとあふとあふとあふとあふ  
 もあふとあふとあふとあふとあふとあふ  
 といはくあれとあふとあふとあふとあふとあふ  
 判者の虚実とあふとあふとあふとあふとあふ

野眼とつひ祖録とを子疑一決とつひのこれいを  
 儒御の心説とて下意のふらふをば法とすよ教化  
 の人れ大秘とありはれやむ此能言の能言は  
 とつよ判ありて世を例の物にとせしことと連言  
 の輝身もつひ控られざる眼也もさへなれや  
 我らの能言とを能言のふらふとありと能言の  
 詞とつよおとありとありとありとありとありと  
 詞とつよありとありとありとありとありとありと  
 我家の能言とを能言のふらふとありとありとありと  
 能言のふらふとありとありとありとありとありとありと

新式よなるの傍訓ありまよ雅言といひ  
 俗語といひとらして能言のふらふにありとありと  
 とととられう能言といひとありとありとありとありと  
 洋や世の中の能言といひとありとありとありとありと  
 とれよ能言のふらふといひとありとありとありとありと  
 世よとありと能言といひとありとありとありとありと  
 能言のふらふといひとありとありとありとありとありと  
 人よとありと能言といひとありとありとありとありと  
 宗近の能言といひとありとありとありとありとありと  
 能言といひとありとありとありとありとありとありと  
 能言といひとありとありとありとありとありとありと



こゝろをわなうらむべき能楽のこゝろと云ふことあり  
ある時よなるの戯あし、論語の精<sup>シラ</sup>いひはれり  
るとし、てゝとて、能のあらひ、こゝろをわなうらむ  
まのちこゝろ、又まの優うとて、いひおて、まに雅俗の  
ちういとまう、こゝろ成、又世の論とて、いひおて、新式の  
能楽、礼よ、こゝろと、一汁二菜、に、こゝろと、ま、と、た、ん、と、い  
か、こゝろ、あ、ら、お、う、こゝろ、の、器、物、よ、氣、と、は、ま、う、車、と、の  
結、構、よ、ま、う、と、い、一、酒、と、二、献、よ、こゝろ、と、い、ひ、と、な、ら  
漢、や、茶、人、の、時、ら、こゝろ、能、楽、の、供、結、と、大、い、ひ、と、い、ひ、  
お、う、ま、い、と、は、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
お、う、ま、い、と、は、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、

よおとまう、わなうらむ、こゝろ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
郷、應、の、舞、う、ん、も、あ、ら、う、こゝろ、能、楽、の、供、結、と、大、い、ひ、と、い、ひ、  
お、う、ま、い、と、は、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
客、者、向、し、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
こゝろ、能、楽、向、し、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
詞、の、お、う、ま、い、と、は、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
あ、ら、う、こゝろ、能、楽、向、し、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
け、し、た、い、ま、い、と、は、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、  
の、ま、い、と、は、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、

Handwritten text in a rectangular frame, likely a page from a manuscript. The text is written in a cursive style and appears to be a list or a series of entries. The characters are somewhat difficult to decipher due to the cursive nature and some fading. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines within the frame.

Handwritten text in a rectangular frame, likely a page from a manuscript. The text is written in a cursive style and appears to be a list or a series of entries. The characters are somewhat difficult to decipher due to the cursive nature and some fading. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines within the frame.

る一々字同よとのいししすらつらひい句「百」も  
出言遠近とも世教を在式に五條ありし今を  
記さるる及びしてを論議の席と傳さる才  
世教の人知とてありて論議の座と傳さる才  
才二と談笑の同儀とありてく肉雅の良才の頌  
とあれや他諸とてその陰晴といくくあり  
おも「財の妻あしくあしくも我らの他諸の他諸を  
他諸のよーあーもあーに他諸を北し何のあ  
法式とせよ何のあちんやとせよとあはれ  
論とせよとせよ一平話の甲の同と推とせよとせよ

いれ居るがうの戯しして重んずるとのつらむの  
変ふかあひつちをたるとのつらむの和とあはれ  
そんをうー他諸とせよとせよとせよとせよ  
とせよとせよ和順と濟秘方自在の人とせよ  
傳曰世篇を全く我家のけあし他諸の式も  
かろねいし書世抄とせよとせよとせよとせよ  
あつていしとせよとせよとせよとせよとせよ  
何のあつてやとせよとせよ何のあつてやとせよ  
所謂とせよとせよとせよとせよとせよとせよ  
て五條のらむとせよとせよとせよとせよとせよ

一矢の如くしつゝとるを日にも時の機軸を

青園とあつめる非のやうに

かゝり萩の 風をいさか

世向を尋ねの折折して月秋の七旬月うら

園と月の階がくれば萩と非の感と

らふ志れいも次の折よびつゝと家と

青園と木のた月おと言ふれつゝと

月と子多ふらりとち

八月と旅おりろよ小幡綿

とらふと一矢の名言ありとて

我々の大藤生とつれのをた

あふつらばはもあふた

とつたはよ一矢の如くをな

あつたはよ一矢の如くをな

虚をまるとつらんとや善あ

論と白馬と祖の常語ちり

家訓もるの真加つひる運

の須便あつた能浩とを例

次と執事のつらと假名と



に指月の喩と云ふ言に他道の用とすめば  
 ちんまをや才この條同に云のれ節とす  
 おに人和の温厲あり今と云私の二子と  
 け法の私曲とすやう言に十論の正道と  
 多に十論の法とすのいれんやと云と  
 五條同と云ふ一いふ我内の文道と云  
 二篇の文と云ふは式の一編と云と云ふ  
 先より一虚の文の記して後人への要と  
 け十論の實息と通してけり他道の云と  
 ような天下に横説の教と云ふ儒の

の教と云ふ忠信の教諸道のほなりてれ子  
 通も文行の字にありかくもそのまふと云  
 二系の二と云と云ふ人といふ所から云  
 ちんまをや才この條同に云のれ節とす  
 おに人和の温厲あり今と云私の二子と  
 け法の私曲とすやう言に十論の正道と  
 多に十論の法とすのいれんやと云と  
 五條同と云ふ一いふ我内の文道と云  
 二篇の文と云ふは式の一編と云と云ふ  
 先より一虚の文の記して後人への要と  
 け十論の實息と通してけり他道の云と  
 ような天下に横説の教と云ふ儒の

の教と云ふ忠信の教諸道のほなりてれ子  
 通も文行の字にありかくもそのまふと云  
 二系の二と云と云ふ人といふ所から云  
 ちんまをや才この條同に云のれ節とす  
 おに人和の温厲あり今と云私の二子と  
 け法の私曲とすやう言に十論の正道と  
 多に十論の法とすのいれんやと云と  
 五條同と云ふ一いふ我内の文道と云  
 二篇の文と云ふは式の一編と云と云ふ  
 先より一虚の文の記して後人への要と  
 け十論の實息と通してけり他道の云と  
 ような天下に横説の教と云ふ儒の



とらるる十論の章義とらるる論とらるる所の人  
とらるる論とらるる所の人とらるる所の人  
に春秋の歎息も口訣 連産に撰出の意に  
て家くの秘訣も一とらるる十條此書文  
今の一條は沈潜とらるる十論の中此大要文  
とらるる論とらるる論語の百八十一  
始とらるるの一字より終とらるるの一字とらるる  
とらるる人とらるる人と萬古不易のたらるる  
とらるる論とらるる論語とらるる沈潜也  
沈潜とらるる論とらるる論語とらるる沈潜也

とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
のたらるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
つらるるの虚実がたらるる論とらるる論とらるる論  
概とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
孫とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
たるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
のたらるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
とらるる論とらるる論とらるる論とらるる論  
和漢の凡雅とらるる論とらるる論とらるる論

曾公の一言とあり世とあり近くとあり書の  
 一代集も浮橋の詞とありてよ角川の  
 ありとありきる今や十論のほをて  
 言に論者の大功とほさる傳行よ木鐸の喻を  
 ありとあり能説のありていよ仰宗の龍樹

ありとありていよ仰宗の龍樹  
 ありとありていよ仰宗の龍樹  
 ありとありていよ仰宗の龍樹  
 ありとありていよ仰宗の龍樹  
 ありとありていよ仰宗の龍樹



